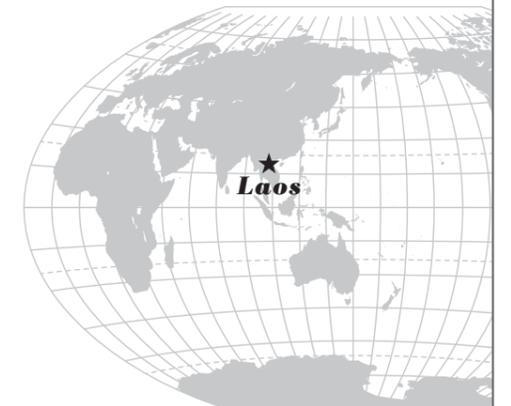


ラオス 小水力発電計画



株式会社安藤・間 国際事業本部土木部ラオス小水力作業所 所長

大矢通弘

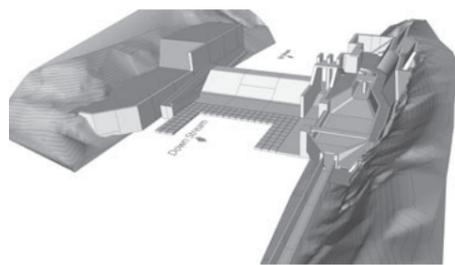
Michihiro Ohya



取水堰(左岸側を終え、右岸側を施工中)



導水路(完成区間)



取水堰完成予想図



プロジェクトの紹介

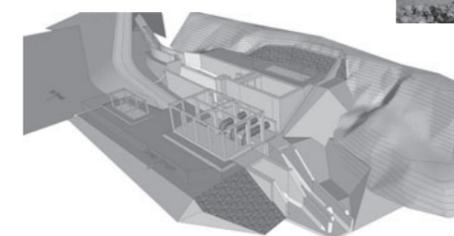
本プロジェクトは、日本政府の無償資金協力により、ラオス北部を流れるウー川(Nam Ou)に水中タービン発電機三台を備える水力発電所(出力四五〇キロワット)を新設するとともに、周辺の未電化村落へ配電線を延伸する(延長約五八キロメートル)、工期一六カ月のプロジェクトである。本プロジェクトにより、一〇村落五八〇世帯(約三、一〇〇人)が新たに電化の恩恵に浴する。また、中国からの電力輸入を抑制し、ラオス国の一七県郡のうちでも最も低いポンサリ県の電化率の向上に資するものである。

工事の現況

現地は雨期と乾期が明確であり、取水堰や放水路等の河川内の構造物は乾期のみ施工となる。二〇一三年十一月に着工し二〇一四年十二月時点のコンクリート打設量は九、三〇〇立方メートル、全体の九一%の進捗である。今後は土木から機器へと工事の重心が移る。現在、二〇一五年一月に機器据付、二月に試運転、二月末引渡しを予定している。なお、土木は自然相手の仕事であり、当現場でも掘削斜面のすべり崩壊や洪水による仮締切堤の越流等の困難に遭遇した。また、中国道路業者との出合丁場や、配電線ル



発電所全景(右岸より望む)



発電所完成予想図

現場の運営

ようやくここまで辿り着いたというのが実感である。

現場は「安全はすべてに優先する」の基本方針のもと、「多様な力の結集」をモットーに運営している。組織はアジア各国からの多国籍部隊で構成し、先達の経験・知恵・人脈に学び、若手のやる気・工夫を引き出すよう努めた。施工は土木をベトナム、配電線をラオス、機器を日本の会社にそれぞれ下請発注した。調達は鉄筋・セメントはベトナム、碎石・砂は中国、軽油・火薬はラオス国内からである。また、現場

現地の生活

ポンサリ県は中国国境に位置し、中国語や通貨・元が浸透しつつある。当地に生活して一年が経過した。第一印象は日本の山村の原風景である。多くの既視感(Déjà vu)のある光景が広がり郷愁すら覚える。しかし、冷静に眺めると、中央から遠く離れた山岳系の少数民族が、辺境という地理的不利を逆手に取り、国境管理の地方への委譲などを活用しながら、たくましく生活している姿が浮かび上がる。辺境の地ならではののしたかな生存戦略である。四周を隣国に囲まれたラオスと海洋に囲まれた日本では、その地政学的側面が大いに異なるが、最近日本でよく議論される『地方創生』のヒントがここウータイ(Ou Thai)の町の生活に埋められていると発想するのも一興ではないだろうか。

の医療体制は日本の医療系NGOにサポートしてもらっている。建設業は本来的にダイナミック(dynamic)な産業である。着工と共に新たな組織を作り、現地での生活基盤を整え、構造物を築造する。そして竣工と共に仮設をすべて撤去し、組織も解散する。この生来のダイナミズム(Dynamism)もうまく活用して、何とか本プロジェクトを成功裡に収めたいと願う次第である。